

序文

アメリカの自然は、常に人々の心を豊かにし、夢を掻き立ててきた。そしてオオカミは、多くの人にとって、自然や自立、自由のまぎれもない象徴である。しかし一方で、オオカミを家畜や自分の家族、そして家族の将来を脅かす存在だと考える人々もいる。

生物学者でもある著者のリック・マッキンタイアが語る物語には、読む者を魅了する力がある。物語は、一九二六年に、イエローストーンの最上位捕食者であるオオカミの最後の一頭をパークレンジャーが射殺したところからはじまる。当時、オオカミがいなくなったことを悼む者はほとんどいなかった。

しかし、その後オオカミの個体数がアメリカ各地で急激に減少し続けると（ついには絶滅危惧種に指定されてしまう）オオカミ保護運動が起こり、一九九〇年代中頃に、イエローストーン国立公園に

三一頭のオオカミが再導入されることになった。それから数十年が過ぎた今、イエローストーンでのこの果敢な試みは、これまででもっとも成功した野生生物保護活動だと考えられている。

著者マッキンタイアがこの再導入の逸話を語る本書からは、オオカミの群れが大自然に復帰する様子を観察し続けた彼自身の情熱と献身、不屈の意志と冒険がありありと伝わってくる。再導入からの数十年間、著者は徒歩で自然の奥深くに分け入り、何千ページにもわたる詳細な記録をつけ、さらには、オオカミをその目で見てもっとよく知りたいと考えて世界中からやってくる旅行者のために、道路脇にフィールド・スコープを設置する作業も続けてきた。

とくに著者が興味を惹かれ、心を奪われたのは、最初に放たれたオオカミのうちの一頭であるナンバー8で、8はやがて本書の主人公となっていく。

マッキンタイアの目を通して見るオオカミの姿からは、一頭一頭が、力強く生きていく個性豊かな存在であることが伝わってくる——そして彼らの互いへの忠誠心や高い知性、生きる意志の強さに、畏敬の念を抱かずにはいられなくなる。

オオカミについてのこの詳細な記録を読み、オオカミをめぐる論議が依然として続いていることを考えたとき、オオカミが生態系で担っている重要な役割と、彼らが公園という保護区から足を踏み出したときに日常生活に被害を被る人々の利益を、どう両立させればいいのかのさうと考えあぐねてしま

報やデータは重要だが、人々がオオカミに共感するための物語も同じように重要だ。その両方が、未来のための決断を生み出す力となりうる。このすばらしい本は、その両方を同時に提示して、わたしたち読者に自ら決断する機会を与えてくれる……それが侵されざるべきアメリカの自由なのだ。

ユタ州サンダンスにて
ロバート・レッドフォード

第4章 小さなオオカミと大きなハイイログマ

ローズ・クリーク・バックが、ヘリコプターで馴化用囲い地に戻された一九九五年の五月一八日、わたしは、クリスタル・クリークの三頭の黒毛の子オオカミの二頭が、仕留めたばかりのエルクを貪っているのを見た。それから、群れの残りの五頭が別のまだ新しい死骸に群がっているのを見た。一頭の黒毛の子オオカミが肉片を口にくわえて死骸から離れると、小さな灰色の子オオカミがその黒毛の子オオカミに近づいていき、二頭はふざけて取っ組み合いをはじめた。灰色のナンバー8は、黒毛の子から肉片をかつさうと、口にくわえて逃げ去った。8は立ち止まり肉を地面に置くと、さっきの黒毛の子が見ている前で、それを使って遊びはじめた。その日、この群れのオオカミは満腹だったので、みんな、その肉片がだれの物になろうと構わなかったのだ。獲物の死骸にはまだ肉がたっぷり残っていて、このオオカミ一家だけでは食べきれないほどだった。

前の冬にクリスタル・クリークの囲い地を警備していた法執行権をもつ女性レンジャーから、囲い地にいる間じゅうずっと、三頭の黒毛の子オオカミたちが、体の小さい灰色の8を容赦なくいじめていたと聞いた。黒毛の子たちは8を追いかけ回し、飛びついて押さえつけ、噛みついてなかなか放そうとしなかった、と彼女は言った。フェンスの中に閉じ込められていた間、子オオカミたちにはほかにやるのがあまりなかったから、灰色の小さな8をいじめることは、三頭の黒毛の子オオカミたちのお気に入りの気晴らしの一つだったのだ。いじめられた8はいつも黒毛の兄弟たちから離れて寝たが、彼らは眠っている8にこっそり近づいて跳びかかった。8はやり返さずに走って逃げるか、ちよっとだけ立ち向かってから逃げるかのどちらかだった。

8は囲い地で一番小さいオオカミだったから、付近をパトロールするレンジャーたちから「おちびさん」と呼ばれていた。その女性レンジャーは、囲いの中に肉が運び込まれたときも、灰色の8が肉にありつけるのはいつも最後だったと教えてくれたが、それもまた8の地位の低さを物語っていた。囲い地での虐げられた8の暮らしをレンジャーから聞きながら、わたしは哲学者フリードリヒ・ニーチェのある有名な言葉を思い出していった。「困難が人をいっそう強くする」。日々成長を続ける8は、過去にいじめられ、ひどい目に遭わされた経験を、この先遭遇する逆境や難題によりうまく対処するための糧にできるだろうか？ そう感じた。

クリスタル・クリーク・バックが囲いの中で暮らした一〇週間で8にとって辛いものだったことを知っているからこそ、わたしは、彼がその頃よりはずっとまともな暮らしを送っていることを嬉しく

思った。自由に動き回れるようになった今、黒毛の子オオカミたちにはやるのがたくさんあって、8をいじめる暇などなくなったのだ。

同じ日のこと、黒毛の子の一头が、残っていたエルクの死骸の一つを食べていると、ハイイログマの母親とその一歳になる子グマ二頭が近づいてきた。片方の子グマが、子オオカミに向かって突進を四度繰り返した。しかし、黒毛の子はそれがただの脅しだとわかっていて、その度に死骸から少し離れるだけだった。しばらくすると、子オオカミは死骸のほうに戻っていき、ハイイログマの一家に取り囲まれてしまった。もう片方の子グマが、子オオカミをちょっと威嚇してから、死骸に近づいて食べはじめた。今回は、子オオカミは逃げようともしなかった。ワイオミング州から見学にきた生徒たちに望遠鏡を渡して、オオカミとハイイログマのこの攻防を見せてやると、一人の男子生徒が「こんなにワクワクしたのは、人生で初めてだよ！」と友だちに向かって歓声を上げた。彼らはオオカミ嫌いで知られる州からやってきた子どもたちだったが、ここでじっさいにオオカミを見たことによって、ものの見方が変わったのだ。それがわかって嬉しかった。

それから数週間、クリスタル・クリーク・バックは毎日のように、朝と夕方に姿を現した。以前は、オールド・フェイスフルなど、もっと遠い場所で移動説明会を行っていたが、今回はタワー・ジャンクションから数キロのラマー・バレーまで車を走らせ、オオカミを見つけて観光客に見てもらい、そのあと再導入の説明をすることができた。ラマー・バレーでオオカミが見られるという情報が、口

コミや新聞記事で広まり、ますます多くの人々が、ラマー・バレーにオオカミを見に来るようになった。やがて道路脇に二〇〇人ほどの人垣ができるのが当たり前になった。クリスタル・クリークのオオカミたちが姿を現すと、人々はまるで人気のロックバンドの追っかけファンのように興奮した。わたしが貸した望遠鏡の向こうにオオカミを見つけて泣き出す人々もいたし、ある女性は、オオカミが公園に復帰したことへの喜びのあまりに、一番近くにいた政府職員であるわたしに駆け寄り、抱きついてきた。

デナリ国立公園での一五回の夏と、イエローストーンでの最初の数年間を通して、わたしは野生動物の写真を熱心に撮り続けてきた。イエローストーンへのオオカミ再導入後も、望遠レンズでオオカミを撮影しようとしたが、そうした撮影が、オオカミの行動研究や、観光客にオオカミを見てもらう活動の妨げになることに気づいた。また、撮影のために野生動物に近づく慣習にも、ますます違和感を抱くようになった。結局、撮影器具一式は持ち込まず、オオカミの観察と、自前の望遠鏡で観光客にオオカミを見てもらうことに集中することにした。

そのうち、オオカミを見にラマー・バレーにやってくる常連客たちは、自分たちで作り上げたルールに従って行動するようになった。人々は道路脇に立ってオオカミを探し、近づいたりはしなかった。公園内で禁じられている、オオカミに遠吠えに似た声を浴びせる行為も見られなかった。彼らはただ、持参した双眼鏡やスポッティング・スコープで、静かにオオカミの姿を見ていた。人々の節度ある態度のおかげで、オオカミは普段どおりの行動を続けることができ、ときには何時間も人々から見える

場所に留まっていた。オオカミ・ウォッチャーが、他の人に自分の望遠鏡を貸してオオカミを見せてあげることもあった。この敬意と分かち合いの精神のおかげで、その場のすべての人々が非常に有意義な体験をすることができた。国立公園での仕事をはじめすでに二一年が過ぎていたが、このような光景は、それまでに働いたどの公園でも見たことがなかった。

またこうしたオオカミを見る体験は、労働者階級、中流階級、億万長者、そして映画スターといったさまざまな社会階層に属する人々を惹きつけた。ある朝、オオカミが姿を見せていたときに、一台のワゴン車がわたしの車の真横に停まった。わたしは車に近づき、望遠鏡があるから一緒にオオカミを見ませんか、と車内の人に声をかけた。すると、背の高いリーダータイプの男性が急いで車から降りてきて、わたしの望遠鏡を覗いてオオカミを確認すると、妻にも見せていいですか、と尋ねた。奥さんのほうも同様にオオカミを見終わると、男性は礼を述べ、自己紹介した。彼は「CNN創業者の」テッド・ターナーで、女性は俳優のジェーン・フォンダだった。彼女からは、その後とても丁寧な礼状が届いた。

クリスタル・クリーク・バックを観察する機会が増えるにつれて、わたしは一頭一頭の個性を知ることになり注ぐようになった。とくに興味をもったのは四頭の子オオカミたちで、彼らが大の遊び好きであることはすぐにわかった。ある夕方、仕留めたばかりの死骸のそばにいる三頭の黒毛の子オオカミを観察していると、そのうちの二頭が別の二頭に近づいてプレイバウ「犬などが前足を伸ばし、胸を地面につけたままお尻を高くあげて遊びに誘う仕草」をするのを目撃した。どうやら、追いかけて誘って

いるようだった。この誘いは通じたようで、誘われた子オオカミが、誘った子を追いかけはじめた。しばらくすると、片方の子オオカミが古びたエルクの枝角を拾い上げた。そこへ三頭目の黒毛の子がやってきて、その角を奪い取ったが、すぐに戻ってきて二頭で角を使った綱引きをはじめた。両親がその場から立ち去ろうとしているのに気づくと、三頭はそのあとを追ったが、遊びはまだ続いていた。歩きながら、一頭が振り向いて後ろの子の前で跳ね回って見せる。するとまた追っかけっこがはじまる。その後二頭は、役割を交代しながら追いつ追われつの遊びに熱中した。

それから数日後、わたしは二頭の黒毛の子オオカミが別の死骸のそばにいるのを見つけた。一頭が死骸から肉を噛みちぎり、空中に放り投げたかと思うと、跳び上がって口でキャッチした。それから肉を地面に落とすと、まるで肉が生きていて逃げだそうとしているかのように、それに襲いかかった。そのあとまた肉をくわえて駆けだし、再び空中に放り上げて、走りながらキャッチした。のちにわたしは、オオカミの子どもの遊びのリストを作り、この遊びを「肉投げゲーム」と名づけた。

そこへもう一頭の黒毛の子オオカミが走ってきて、最初に肉で遊びはじめた黒毛の子を追いかけた。前を走る黒毛の子が肉を落とし、後ろの黒毛がそれを口にくわえる。そのまま肉をかつさらって逃げると、肉を奪われた子オオカミがそのあとを追いかけた。追いかけてこは途中で逆転し、追われていた黒毛が追っていた黒毛を追いかける。と思うと、先を走っていた黒毛の子オオカミがふいに動きを止めて、生い茂る丈の高い草の中で身を伏せた。追ってきたもう一頭の黒毛の子がすぐそばまで近づくと、草の茂みに隠れていた子オオカミがふいに跳び上がり、追っ手を地面に押し倒した。わたしは

これを「待ち伏せゲーム」と名づけた。

その後、並んで立っていた二頭の子オオカミのうちの一頭が突然走ってその場を離れた。まるで、ここまでおいで、ともう一頭を誘っているかのようなだった。誘いに乗った黒毛の子が全速力であとを追いかけた。二頭はその後、役割を交代しながら、ときには一直線に、またときにはジグザグに走って追いつ追われつの追いかけてこを繰り返した。二頭はお互いの前で駆け回り、跳ね回り、くるくる回って見せた。どちらがどちらを追いかけているかはどうでもいいことで、重要なのは、勝つことではなく楽しむことだった。この子オオカミたちの行動を一言で形容するなら、喜びに満ち溢れていた。彼らを観察しながら、「この子たちはオオカミであることが嬉しくてしかたがないんだな」とわたしは考えていた。

そして子オオカミたちの遊びはすべて、実生活に役立っていた。のちに、わたしはメスのエルクが、クリスタル・クリークの子オオカミの一頭を追いかけているのを目撃した。直線距離なら、エルクはオオカミより速く走れるが、子オオカミが敏捷な動きでジグザグに行ったり来たりするので、メスエルクはうんざりして追うのをやめてしまった。あの元気いっぱい追いかけてこで鍛えられたおかげで、子オオカミはメスエルクを出し抜く術を身につけたのだ。ときには、子オオカミのほうからエルクを誘って追いかけることがあった。エルクの群れの前でプレイバウをして追いかけてくるように仕向けた子オオカミが、遊びで習得した技を駆使してやすやすと逃げ切るのを見たことがある。まるで自分の力を見せつけるかのようなようだった。

この年の春、じゃれ合う子オオカミの姿を観察しながら、わたしはイエローストーンがクリスタル・クリークのオオカミたちにとって天国のような土地となった理由について考えていた。彼らの新たな縄張りに、オオカミを銃で撃つたり、罾を仕掛けて捕らえたりしようとする人間はいなかった。彼らはただ、野生のオオカミとして暮らせばいいだけだったのだ。

ある朝、8がラマー・バレーをひとりで歩いているのを見かけた。それに気づいた五頭のメスエルクがあとを追ってきた。8は走って逃げ、不安そうに後ろを振り返ると、エルクたちが追ってきたのを見てさらにスピードを上げようとした。すると追っ手も同じように速度を速めた。しかしエルクの集団は、8まであと一メートルほどの距離に迫ったところで急に関心を失い、別の方向へ走り去った。そのまましばらく進んだ8は、大きなオスのバイソンが草原に寝そべっているのを見つけた。8は身を低くかがめ、バイソンの背後からこっそり近づいていった。すぐに、バイソンのお尻まであと一メートルもないところまでできたが、どうやらそのあとどうすればいいのかわからない様子だった。体重九〇〇キロはありそうなバイソンは何気なく後ろを振り返り、すぐ後ろにいるちっけなオオカミをちらりと見た。しかし何事もなかったかのように前を向き、再び食物の反芻はんすうに取りかかった。灰色の8は、ますますどうしていいかわからなくなってしまうた。とそのとき、バイソンが蚊か何かを追いかけて尾をすばやく動かした。8は大慌てで後ろを向いて逃げだした。このとき8が、バイソンは餌動物として適切かどうかを見極めようとしていたのだとしたら、この動物は大きすぎて手に

負えない、という結論に達したのは明らかだった。

その朝の灰色の8に取り立てて印象に残る点はなかったが、同じ日の夕方、わたしは彼の新たな一面を知ることになった。灰色の8と彼の黒毛の兄弟たちのうちの二頭がじゃれ合ったり追いかけてっこをしたりして遊んでいた。ところが、その三頭が一斉に動きを止めて西の方角を見つめたかと思うと、視線の先にある針葉樹の木立に飛び込んだ。しばらくは、林の中を行ったり来たりして駆け回る三頭の姿がちらちら見えていたが、一瞬姿を見失ってしまった。と、そのとき、黒毛の子の一頭がエルクの子どもの死骸をくわえて林から飛び出してきた。さらにもう一頭の黒毛の子、ややあって小柄な灰色の8も姿を現して最初の黒毛と同じ方向へ走っていく。そのすぐあとに現れたのはハイイログマで、クマは8のすぐ後ろに迫っていた。クマは8とは比べものにならないほど大きい。まるで、映画『ジュラシック・パーク』の、人間の子どもが恐竜に追いかけられるシーンを見ているかのようだった。

ハイイログマがコニファー〔針葉樹の総称〕の林の中でエルクの子どもを殺したのは明らかだった。最初に飛び出してきた黒毛の子が、他の兄弟たちがクマの気を引いている隙に獲物をかささらって逃げたに違いなく、そのクマが今、小さな灰色の子オオカミに迫っていた。クマが前足の鉤爪を子オオカミに向かって振りかざし、殴り倒して殺す様子が目に浮かんだ。これから起ころうとしていることを思っ緊張が高まった。8についてわたしが知っていること、そして体格のいい黒毛の兄弟たちにいじめられてきた彼の過去を考えると、次に起きたことは驚き以外のなにもでもなかった。

8は立ち止まり、振り返ってハイイログマに正面から向き合ったのだ。この行動に驚いて、クマも唐突に動きを止めた。二頭の動物は、ほんの一メートルほどの距離で対峙した。まるで、旧約聖書に登場する巨大なペリシテ人ゴリアトに立ち向かう少年ダビデを見ているようだった。子オオカミに反抗的に睨めつけられて、ハイイログマはどうすべきかわからなくなってしまったように見えた。

灰色の8が思いがけない英雄的勇敢さを示してクマに立ち向かっている間に、子エルクの死骸をくわえた黒毛の子オオカミは、すぐ後ろをついて来たもう一頭の黒毛の子と一緒にまふまふ逃げお世話した。二頭は森の奥へ消えた。わたしは、小さな8とハイイログマのほうに目をやった。二頭は至近距離で睨み合ったままだ。そのとき、灰色の8がクマに背を向けて、何事もなかったかのようにその場から去っていった。クマはもう追いかけてこない、と強く確信しているかのようだった。

クマは鼻をヒクヒクさせて地面とその周辺の匂いを嗅いだ。しかし、オオカミたちが獲物と一緒にどちらへ消えたのかわからなかったようで、逆の方向へ行ってしまった。しばらくして三頭が森の中から出てくるのを見た。エルクの子どもの死骸をくわえた黒毛の子が寝そべって獲物を食べている間、もう一頭の黒毛の子と8は彼の所有権を尊重し、すぐそばで伏せていた。

わたしはこの出来事によって、8は思っていたよりずっと見どころのあるオオカミだと気づいた。兄弟の中で一番小柄で、体の大きな他の兄弟たちにいじめられていた彼だが、見上げるほど大きなハイイログマに立ち向かい、何とか切り抜けるだけの度胸の持ち主でもあったのだ。しかし考えてみれば、クリスタル・クリーク・バックのだけれも、他の兄弟たちも、両親も、彼がクマのほうに向き直り、

立ち向かう姿を見ていないのだ。わたしは、8の勇氣ある行動の唯一の目撃者だった。それから数日後、ザ・ロックことドウェイン・ジョンソンがこの日の小さな子オオカミにびつたりの名言を述べた。「ヒーローとは、だれも見えていなくても正しい行ないをする者のことだ」と。この出来事から数日後、8が群れを率いてメスのムースを追う姿を見かけた。これもまた、8の著しい成長を感じさせる出来事だった。

七月五日の早朝にラマー・バレーに出かけたわたしは、8が二頭の黒毛の子オオカミたちと一緒にいるのを見つけた。三頭は相手を変えながら取っ組み合いを楽しんでいたが、灰色の8も決して負けてはいなかった。その後、黒毛の子の一頭が、小柄な8を追いかけながら何度もつまずいたり、倒れたり、転がったりを繰り返した。黒毛の子が地面に転がっているのを見ると、8は駆け戻り、じゃれ合うように跳びかかっていた。そのまま二頭は互いを噛み合って遊んでいたが、やがて黒毛の子が身を振らせて灰色の8の下から這い出してきた。8はそのあとをしばらく追ってから、黒毛の子たちを先導して歩き出し、やがて森の中に消えてしまった。

この日を境に、クリスタル・クリーク・バックは数か月間姿を見せなくなった。エルクの群れが、食糧を求めてより高地に移動したため、彼らもそのあとを追ったのだ。オオカミの姿が見えなくなったこの数週間に追跡飛行を行なったマイクとダグは、クリスタル・クリーク・バックが広範囲にわたって移動していることを確認した。ラマー・バレーから南に三二キロ離れた、イエローストーン湖のすぐ北側に位置するペリカン・バレーで確認されることもたびたびあった。8はどうしているだろう

う、とわたしは考えた。8は家族のなかで最下位のオオカミだったが、よいパートナーと、だれの縄張りでもない土地を見つけさえすれば、群れのすぐれたリーダーとなれる資質を示していた。彼の三頭の黒毛の兄弟たちのことも気がかりだった。これからやってくる次の一年は、この四頭の一歳児たちにとって、命運を分ける重要な年になるだろうと思われた。